



優秀賞



大熊町大原川地区復興拠点の ランドスケープデザイン

株式会社ランドプランニング 萩野一彦
株式会社プランニングネットワーク 友森千春
藤造園建設株式会社 石川重雄・友保容子

本業務は、東日本大震災原発事故によって帰還困難区域となった福島県大熊町大川原地区約18.3haに、町民が自然に包まれ安心して暮らせ、豊かなコミュニティを再生できる新しい街をつくることを目的としたランドスケープデザインである。①住宅地（街区マスタープラン、道路（舗装等）、広場、植栽デザイン）、②水路、③里山（生物多様性計画、公園等）の基本設計を行い、施工会社が行った実施設計のデザイン監修を行った。

大川原『相馬千年の街』『頭森の庭に暮らす街』をつくる

大川原地区は、復興に向けた長く粘り強い取り組み（戦い）の本陣である。ふるさとを思う町民にとって、いつかは戻りたいという気持ちを抱くことができ、素朴でありながら永久にあり続ける強さをもつことが必要。頭森と呼ばれる溜池と里山に囲まれ、相馬の時代から千年続くこの地に、これからの千年を見据える理念を持つことが重要である。このため、デザインテーマを以下のように設定し、基本設計を行った。

- ・色褪せない自然の素材（石、土、植栽、水）を使い素朴な親しみやすいデザイン

作品概要

作品名——大熊町大川原地区復興拠点のランドスケープデザイン
所在地——福島県大熊町
発注——大熊町、UR都市機構（事業代行）、
中里・鹿島復旧・復興建設工事共同企業体（設計施工）
設計——株式会社ランドプランニング
設計協力——土木：栗原裕（故人）・志津充晃（有）ユー・プラネット）
自然環境調査・計画：八色宏昌・湯本香織（景設計画株）
監理——UR都市機構
施工——中里・鹿島復旧・復興建設工事共同企業体（元請）
藤造園建設株式会社（造園工事）
設計期間——2018年1月～2019年5月
施工期間——2019年3月～2020年10月（造園工事）
規模——18.3ha
主要施設——役場新庁舎、復興公営住宅、商業施設、交流施設、
医療・福祉施設、教育施設

作品評

この作品は、東日本大震災被災地の復興拠点となる街づくりのランドスケープデザインであり、応募者は住宅地・水路・里山の基本設計と実施設計のデザイン監修に携わった。

住宅地については、住棟の間に設けられた水路や共有庭となる広場・歩行者専用路に対して、住宅敷地と公共空間の境界を感じさせないデザイン処理がなされており、建築とオープンスペースが一体化した居心地のよい居住空間を生み出している。

また、このプランの特色は、農業用水を住宅地内に引き込み、潤いのある水路空間を創出していることで、応募者の巧みなランドスケープデザインによって、現場発生材を用いた庭園風の流れと生物多様性の環境を持つ良好な水辺環境が形成されている。

この他、頭森公園周辺でのホルタルの生息環境づくりや里山再生に向けた公園デザインにも取組んでおり、こうした点が評価されて優秀賞となったが、選考会では街区マスタープランとの関連性の説明がもう少し欲しかったという指摘があった。



①庭先の庭園風の流れ（洲浜部）②住宅の庭先と一体となった流れ ③住宅の共有の中庭となる広場 ④住宅地の全景 ⑤住宅地内道路のデザイン（道路の庭先化）⑥コミュニティ農園 ⑦生物多様性のデザイン ⑧庭先の庭園風の流れ（洲浜部）⑨落差工のデザイン（水音演出／生物移動）

- ・大地と自然に守られた庭園を思わせるランドスケープ
- ・大地と自然の恵みを受けて暮らす営みのシステム

住宅地（復興公営住宅）のデザイン

コミュニティ形成を促す住環境のデザインが必要であったことから、コミュニティ道路やコミュニティ農園を提案しデザインした。

街区マスタープラン（道路線形、緑地配置、宅地割）では、建築のパートナーの役割を果たし、公営住宅建築（福島県及び学識者）との調整により設計を行った。また、道路デザインでは、短期での調整のため、舗装・排水施設・その他設備の土木基本設計を含めて行った。

水路のデザイン

下流の農地へ給水する農業用水路を地区内に引き込み、住宅地に潤いを与える親水空間とすることが求められた。これに込め、住宅の庭先に歩行者動線とともに「庭園のような流れ」を

つくり、ふるさとを感じる交流の場、コミュニティの場、生物多様性の場とすることをコンセプトに水路デザインを行った。土木の現場の中で庭園的のデザインを実現するため、造園施工会社を実施設計・施工者とし、デザインを共有し的確な施工を行うための体制をつくり、施工までのデザイン監修にあたった。

公園における里山環境のデザイン

調査により確認されたホルタルの生息は、地元出身者も初めて知り、ふるさとの自然への興味が高まった。このことから、自然・生物とのふれあいがコミュニティ形成につながることを念頭に、ホルタルの生息環境をはじめとした生物多様性のデザインと育成プログラムを立案した。

未来に向けて（グリーンインフラとしての定着）

今後、グリーンインフラとしての定着に向けて、空間だけでなく自然・生物とのふれあいが大きな役割を果たし、次世代を担う子どもたちを育むことへの期待が広がる。